

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

IV - I

1977

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

IV - I

1977

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

001-2
SA-27

はじめに

県下におけるほ場整備事業とともに埋蔵文化財の発掘調査もはや四年目を迎へ、莫大な調査の成果が蓄積されつつあり注目されるところである。しかし、反面事業区域の増大は一途をたどり、調査件数、規模の増大は著しいものがあり、工事と平行する調査は困難をきわめること再々と言える。

このような状況をふまえ得られた成果をすみやかに地元に還元する作業もまた重大な責務であろうと考える。

本報告書の作成には、地元教育委員会をはじめ地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言、援助を得ることが出来た。記して感謝したい。

昭和52年3月末日

滋賀県教育委員会事務局
文化財保護課課長
藤沢守雄

目 次

はじめに

例 言

第 1 章 草津市下寺観音堂遺跡 1

1	はじめに	3
2	遺 構	3
3	ま と め	5

第 2 章 草津市下物花摘寺遺跡 7

1	はじめに	9
2	遺 構	9
3	ま と め	11

第 3 章 野洲郡野洲町下繰子遺跡N地区 13

1	はじめに	15
2	調査の経過	16
3	調査の結果	17
4	ま と め	18

第 4 章 野洲郡野洲町江部遺跡 19

1 位置と環境	21
2 調査の経過	21
3 調査の所見	25
4 出土 遺 物	28
5 結 び	30

第 5 章 犬上郡多賀町水沼莊跡遺跡 37

1 はじめに	38
2 位置の環境	41
3 遺 構	42
4 遺 物	46
5 ま と め	47

図版目次

- 草津市觀音堂遺跡
1. (1) 出土遺物 (写真)
 - (2) 出土遺物 (写真)
- 草津市花摘寺遺跡
2. (1) 出土遺物 (写真)
 - (2) 出土遺物 (写真)
- 野洲町下織子遺跡N地区
3. (1) N区全景
 - (2) N-1、N-2 近景
4. (1) N-3、W-4 近景
 - (2) N-5、N-6 近景
5. (1) N-6、N-7 近景
 - (2) N-6、柱根出土状況
- 野洲町江部遺跡
6. (1) 遺跡 (写真)
 - (2) 遺跡 (写真)
7. (1) 遺跡 (写真)
 - (2) 遺跡 (写真)
8. (1) 遺跡 (写真)
 - (2) 遺跡 (写真)
 - (3) 遺跡 (写真)
9. (1) 山上遺物 (写真)
- (2) 出土遺物
10. (1) 出土遺物 (写真)
- (2) 出土遺物 (写真)
11. (1) 出土遺物 (写真)
- (2) 出土遺物 (写真)
12. 遺物実測図 (1~31)
13. 遺物実測図 (32~54)
- 多賀町水沼莊跡遺跡
14. (1) 水沼莊古絵図 (天平勝宝3年正倉院藏)
 - (2) 犬上郡条里と水沼莊城想定図
 - (3) 絵図莊城復原略図
15. (1) 高畠地区遠景 (中央工場の左手前微高地、手前は敏満寺集落)
 - (2) 高畠東辺を流れる二ノ井幹線 (遠景は敏満寺集落)
16. (1) 掘立柱検出状況 (西より)
 - (2) 同 (南より)
17. (1) 溝1、2 および道路跡
 - (2) 台地中央を流れる川跡

表 目 次

野洲町江部遺跡

1. 遺物観察表	31
----------	----

挿 図 目 次

草津市観音堂遺跡

1. 調査区設定図	4
-----------	---

草津市花摘寺遺跡

1. 調査区設定図	10
-----------	----

野洲町下縁子遺跡N地区

1. 遺跡位置図	15
----------	----

2. 調査区設定図	16
-----------	----

3. 造構全図	17
---------	----

4. 出土柱根実測図・写真	17
---------------	----

野洲町江部遺跡

1. 遺跡位置図	22
----------	----

2. トレンチ配置図	23
------------	----

3. 土層模式図	25
----------	----

4. 造構実測図	27
----------	----

5. 畦畔断面図	29
----------	----

多賀町水沼莊跡遺跡

1. 遺跡位置図	40
----------	----

2. 地形およびトレンチ配置図	42
-----------------	----

3. 造構平面図	43
----------	----

4. 建物跡構成図	44
-----------	----

5. SD02内堆積土層図	46
---------------	----

6. 遺物実測図	46
----------	----

第1章 草津市下寺観音堂遺跡

1. はじめに

下寺觀音堂廢寺は、琵琶湖の南西、湖南平野の湖岸に程近い、草津市下寺町に所在する寺院址と考えられる遺構である。地形的には、野洲川による三角洲性低地の中にあって、守山市吉身から草津市芦浦・下寺にまでのびる、旧野洲郡と旧栗太郡境でもあった旧野洲川南流の形成した微丘陵上の最西端に位置する。附近には、弥生時代から歴史時代にいたる遺構が数多く近接・重複すると共に、「日本書紀」安閑天皇元年條「位置近江國草浦屯倉」の芦浦に軒を接している。また、近隣の各々の最適所には、白鳳～奈良時代の寺院址(?)が密集し、遺跡台帳上、恰も群集寺の様相を呈する一地域でもある。現在、これらの寺院址を想起させるものは、道路の片隅に追いやられた数個の礎石と、耕作時などに偶然姿を表わす瓦の小片のみである。今はその寺院址の上に、その歴史も伝えられず、多くの人々が生活を営んでいる。

今回、圃場整備によって水田面の景観が著しく変わる為、寺院址の規模等の確認を目的として、下寺町の工事進行中の周辺水田の一部について試掘調査を行なった。以下、その概略を述べる。

2. 遺構

主な遺構は、互いに直交する旧水路遺構などの13本の溝と、1つの池状遺構である。

SD-1

寺域南限内郭の東西溝（小溝）で、残りの良い所では、上面の幅1.35m深さ 0.5mの逆台型を呈している。溝内には多量の赤瓦を含んでいるが、土器・木製品等は希である。溝内堆積層は最下層に砂を見る以外全て粘土層で、極めて緩傾斜に開削された当初は、0.2/88mながらも西流していたが、しだいに流れなくなつていった様である。

SD-2

SD-1と心々距離9~10mで、その南側に平行して流れる東西溝（大溝）で、現在の所上面の幅は4~5m、深さ0.4~0.5mと、トレーナーごとに差が生じているが、これはSD-2が今まで流路を僅かづつ変えながらも、ほぼ同じ位置に踏襲されてきた為である。溝内は、数度の大きな改修を受けていて同一溝内であっても遺物の年代に可成りの幅がある。

SD-3

寺域西限内郭の南北溝（小溝）で、SD-1と南側で合流し、SD-2に流れこむ。この溝は、砂層を切って掘られた溝の為か、溝幅もSD-1などよりは広い様であるが、全



挿図1 調査区設定図

体として等しい規模に開削されたものと考えられる。

SD-4

SD-3と心々距離9~10mで、SD-3と平行に流れる南北溝であるが、後世の溝全体に及ぶ改修の為、その遺物等も僅である。SD-2と南西隅にて直交する。

SD-6

寺域東側の東西溝で、上面の幅2.3~3m深さ0.3~0.5mの溝であるが、その遺物は寺院址を裏づける多量の土器・木製品よりなり、特に他の地区にくらべ墨書き器が多く出土した。

SD-14

N-30°-Eの傾きをもつ、上面幅1.6m深さ0.4mの溝で、溝内には、瓶（信楽）、綠釉、瓦（平安末）黒色土器等などが多量に投棄された溝である。伝承による、16世紀中葉の寺院廃絶を裏づける遺物群である。

上記、簡単にその遺溝を略記してきたが、SD-1とSD-3の合流点での遺物のあり方や、ほとんど完形であることや、牛骨（？）の存在することなど、また天神社東の池状遺構内出土の、土師皿、木玉、木偶といった一連の遺物との関係など、多分に宗教面での問題も浮かび上がっている。

3.まとめ

今回、試掘調査を行なった下寺観音堂廃寺は、当初考えていた寺域よりも数倍大きな、2町四方の敷地を有するのではないかと思われる遺構群（主に溝）を検出した。この規模は、現在の下寺の宅地・畠などの全ての域を含むもので、まさに古代寺院址の上に下寺が存在しているのである。さらに我々の興味を引くものは、内郭溝（SD-1.3）が、交いに直交する方格割の溝遺構に規制されて施行されたもので、方角を等しくしている点である。出土遺物から、7世紀末には存在した、この寺院址に先行する地割遺構がこの地域一帯に存在する可能性を大きくしたのである。

現在、遺物整理、などが進行中であり、詳しい報告は、本報告に譲るものとする。

（辻 広志）

第2章 草津市下物花摘寺遺跡

1. はじめに

下物花摘寺廃寺は先の下寺觀音堂廃寺に近接すること北西 150 m に存在する古代寺院址と考えられる遺跡である。現在、下物町の東側（下物の入口）に鎮座する天満宮の敷地内が寺院址の中心伽藍と考えられ、數十個の礎石が一隅に集められている。この礎石中には、塔心礎を改作したと伝えられる手洗石や、塔露盤ではないかと言われる正方形の石造物が所狭しと並べられている。今回、圃場整備によって破壊される水路部分を中心に、天満宮前面（天満宮内敷地と水田面の比高は約60cm）の水田の一部について試掘を行なった。以下概略を述べる。

2. 遺構

SD-51

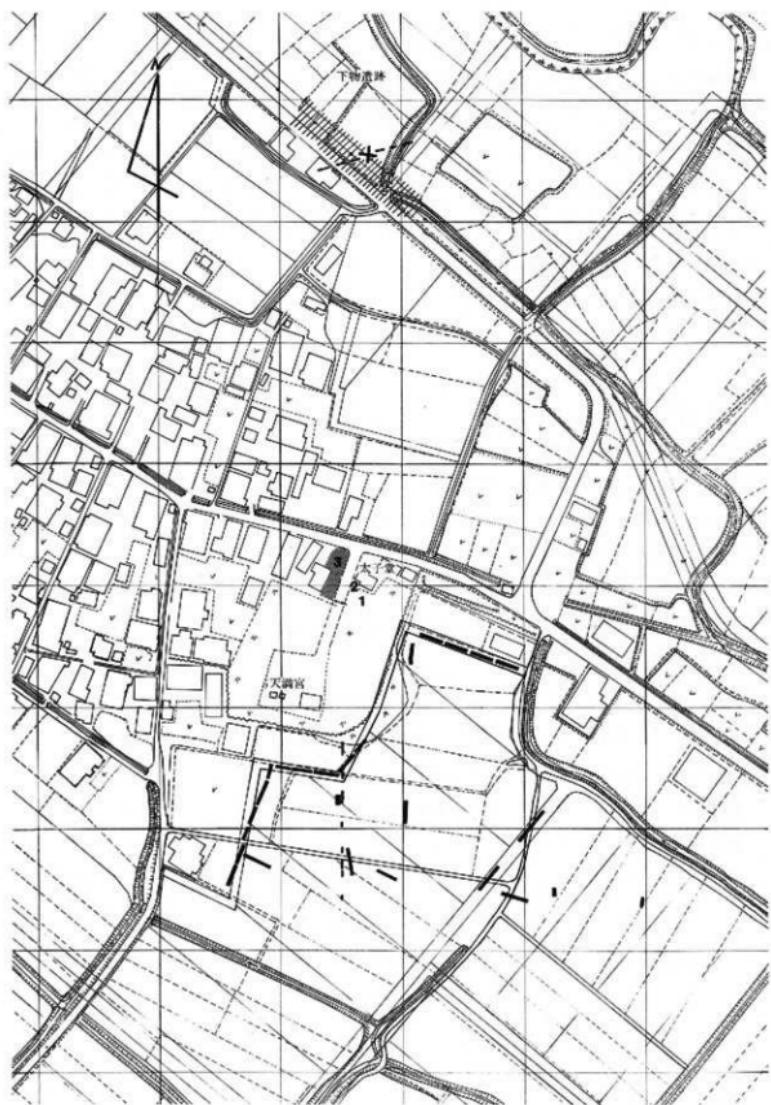
発掘前より下寺觀音堂廃寺での方格地割の存在がこの寺院址をも規制している可能性が高いことから、花摘寺の前面の東西水路（すなわち下寺觀音堂北側溝の延長部分）を捜す為、南北に一本のトレンチを入れた。以前より現在の条里方向の畦畔と異なる角度を示す農道の南側で、それらしき溝跡を芦浦側まで検出したが、上層の一部に瓦を含むのみで他に遺物を含まず、少なからず疑問が残った。さらに、この東西溝に対して南北溝を捜す為、数本のトレンチを入れたが、明確な遺構を検出できなかった。

SD-52

天満宮直下の前面で不定方向の溝（？）を検出した。この溝はトレンチの狭いことや諸般の事情によって規模等を確認できなかったが、粘土層中に多量の瓦を含み、寺院址と深い係りをもつ遺構であり、直下の天満宮敷地内とのあり方や、本来石製露盤が露出していた位置とも伝えられることなどから、主要伽藍をとりまく溝造構である可能性も高い。

掘立柱遺構

12トレンチで、東西方向に1.1m間隔で3つの柱穴を検出した。この柱穴の一つには底部に、平瓦片を用いて礎板の代わりに使用しており、さらに、このトレンチの南側にこの柱穴に続く遺構が存在するものと思われ、小規模な掘立柱建物か柵列が予想される。



挿図1 調査区設定図

3. まとめ

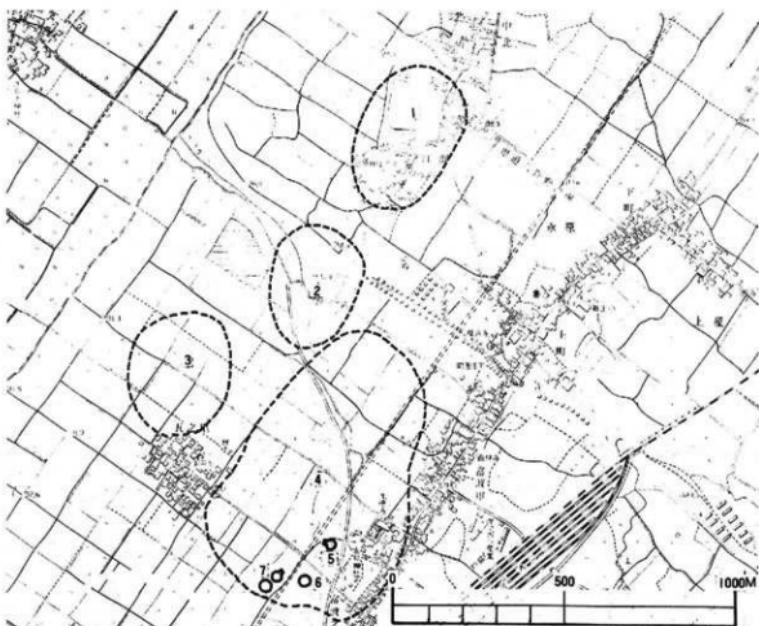
試掘によって得た成果は十分とはとても言えないものの東西方向の溝の存在と、中心伽藍に接する溝（？）の存在、である。これらの遺構には瓦以外の遺物をほとんど（SD-52より出土した須恵環身1点のみ）含まず、あまり多くを語ることができない。しかし、寺域北方の新設水路の掘削時、多くの瓦と共に土器陶器の出土をみており、寺域北側に雜舎の多かったことが想像される。また、寺域内には、双塚と称される二つの塚が存在していた様であるが、今はその位置も明らかでなく、今後の究明を待たねばならない。なお、伽藍（天満宮境内）周辺の発掘が数箇月後に行なわれるという時期でもあり、本報告と共に後補されることを願うものである。

（辻 広志）

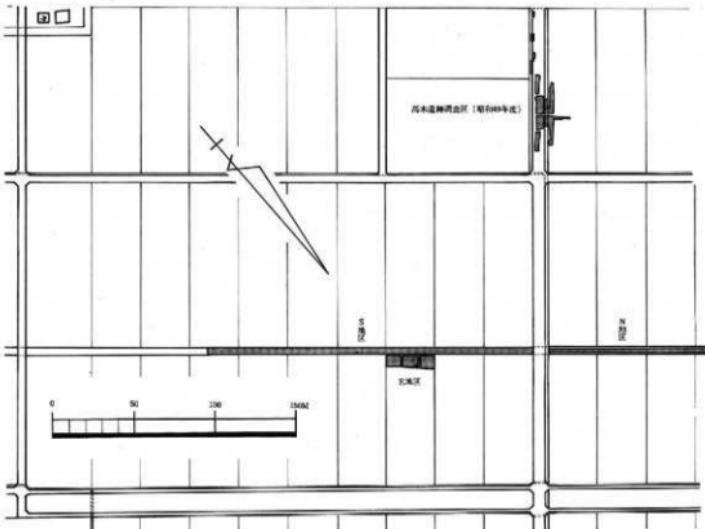
第3章 野洲郡野洲町下繩子遺跡N地区

1. はじめに

野洲町下緑子遺跡は、昭和49年末、ほ場整備事業に伴って発見され、同年、排水路部分90m余について確認調査がなされた。調査によって、遺跡がさらに南東に広がることが判明したため、昭和50年度において、排水路の続き部分を、さらに200mにわたって、試堀調査を実施したところ、この部分にも遺構の広がりが認められた。そして、遺構のレベルが予想以上に高く、計画通り実施されれば、かなりの遺構が削平されることも判明した。そのため、関係者と協議し、設計変更等を要請したが、地区境界、換地等の問題で排水路部分の設計変更については、全く不可能ということになり、本年度、完全調査を実施することになった。そして、昭和49年度試堀したN地区について、国庫補助を得て、昭和51年11月9日～12月18日の一ヶ月余を要し現地調査を実施した。



挿図1 遺跡位置図

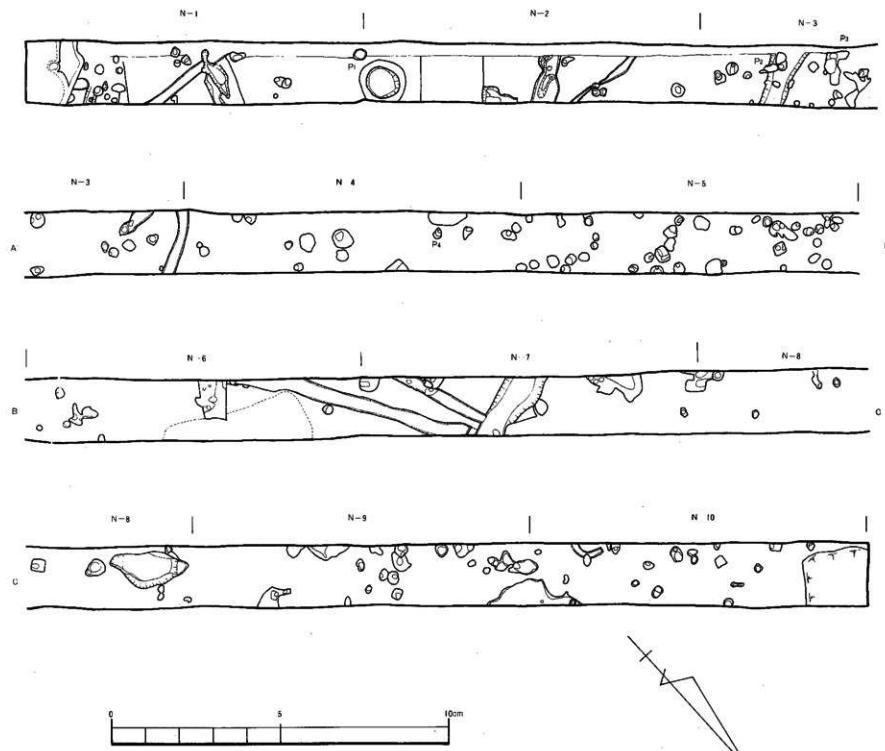


挿図2 調査区設定図

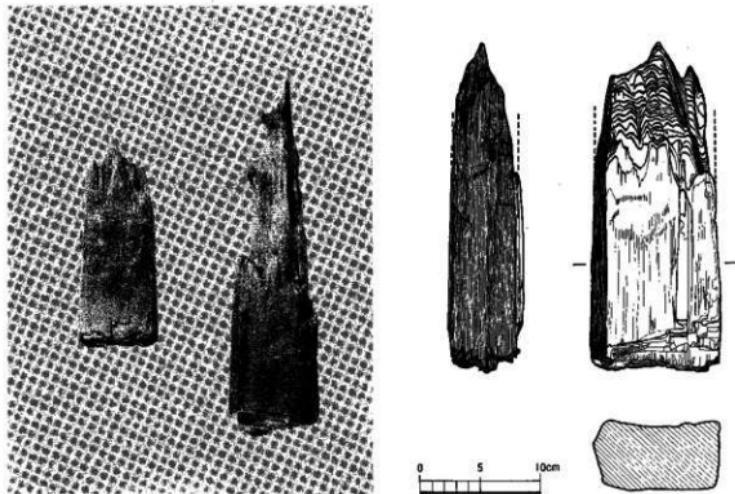
2. 調査の経過

49年度調査後、は場整備事業が実施され、地形が大きく変更されたので、新たに幹線道路を基準に10m間隔の地区を設定、北に向って、N-1区～N-10区の記号を付した。これに基づきN-1区より順次さきの調査後流れ込んだ土砂を除去し、遺構検出を行なった。部分的に黒色を呈する包含層が確認されたが、大部分が除去されており、多数のピット・溝跡などが検出された。11月中旬より遺構の堀り下げを開始、溝跡を含め、遺構に伴う遺物は、きわめて少なく、N-9・10区において、若干の加工木を含んだ落ち込みが発見されたほか、二、三のピット（P.1～P.4）より柱痕が検出された。

12月上旬より、平面実測、写真撮影を順次完了、若干の補足調査をして終了した。



挿図3 遺構全図



挿図4 出土柱根写真・実測図

3. 調査の結果

造構の層序については、試堀調査の報告に詳細であり、それに譲るとして、造構は、黒色を呈する遺物包含層を除去した、青灰色を呈する粘土質の地山を掘り込んでつくられている。

造構としてまとまるものではなく、十数条の溝跡と多数のピットからなる、溝は、いづれも小規模で、幅0.5~1.0m内外で深さも10~15cm程度であった。試掘調査では、古式の須恵器を出すものと、土師器のみのものがあったとされるが、今次調査では、土師器破片が若干出土しただけであった。ピットについては、柱痕を残すものが若干あり、建物の一部であることが予想されるものもあるが、調査域が限定されているためまとまるものはなかった。

遺物の年代は、出土遺物が、若干の土師器片と加工木のみであり判然としがたい。しかし、今回の調査においても須恵器の出土が知られないこと、前回調査およびE・S地区の状況からして、古墳時代前期を大きく降るものではないと考える。

なお図示した柱痕は、残存長27cmで、長辺10.3cm、短辺6cmの角柱である。堅微な材質で表面に上方から下方への加工痕が残る。

4. まとめ

以上、下緑子遺跡N地区の第三次調査の大要を述べた。N地区は、幅2m、長さ90mという排水路部のみの調査であり、遺構の性格は、ほとんど明らかにできなかった。しかし、調査によって、古墳時代前期に属すると思われる集落一下緑子遺跡の北限が明らかになり、不完全ながらも、その一部が検出されたことは、この地域の歴史を解明する上で、若干の寄与をなすものと思われる。

(大橋 信弥)

第4章 野洲郡野洲町江部遺跡

1. 位置と環境

今回、ほ場整備の対象となり、発掘調査を実施した江部遺跡は、野洲町大字永原字田軍田で、同地の菅原神社東側の水田にあたる。本遺跡は、これまでに野洲町教育委員会によって、土師器の散布が確認されている。

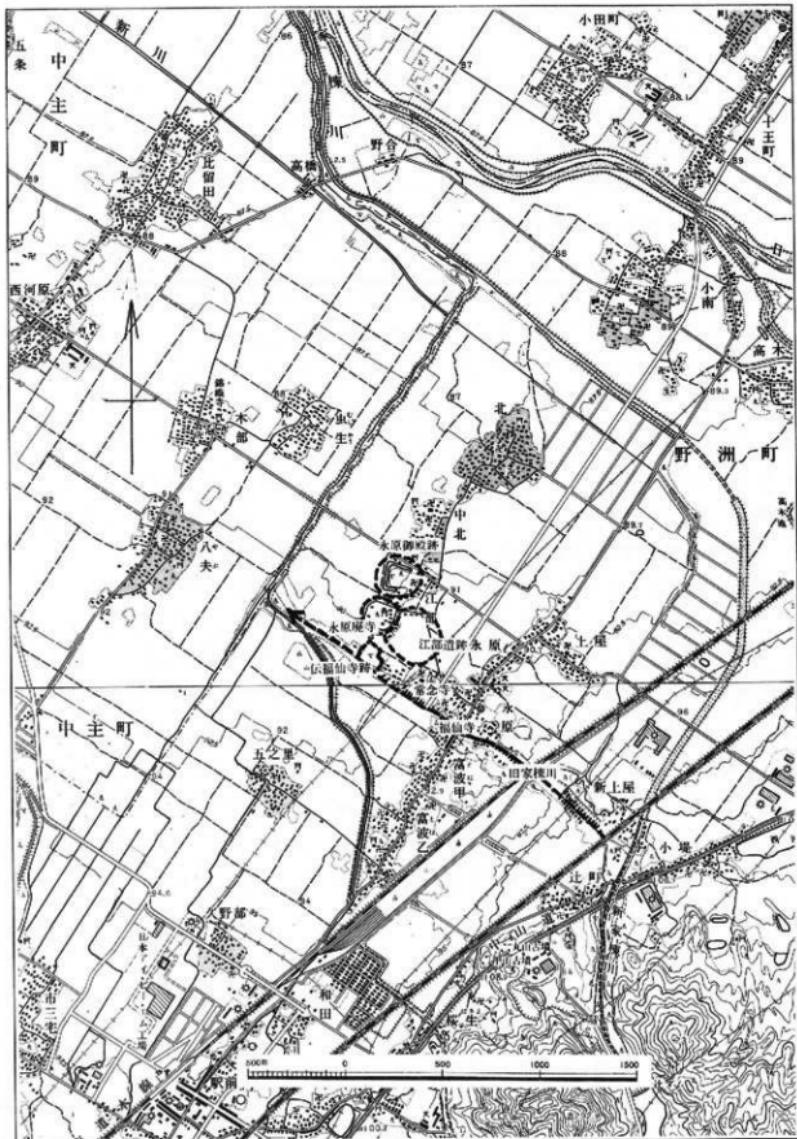
江部遺跡周辺の景観は、宅地造成などによってしだいに変貌しつつあるが、なお旧態を留めている。調査地点の南側には、かつて東南から西北方向に、家棟川が流れていた。しかし、この川は天井川で、過去にしばしば氾濫をおこしており、後に現在の流路に変更された。廃止された旧家棟川の河川敷は、現在宅地化されて姿を変えているが、周囲の水田にくらべてやや高まっていることに、往時の面影を残している。

江部遺跡の周辺には、これまでにいくつかの遺跡と、遺跡の存在を推定させる遺物や地名が知られている。

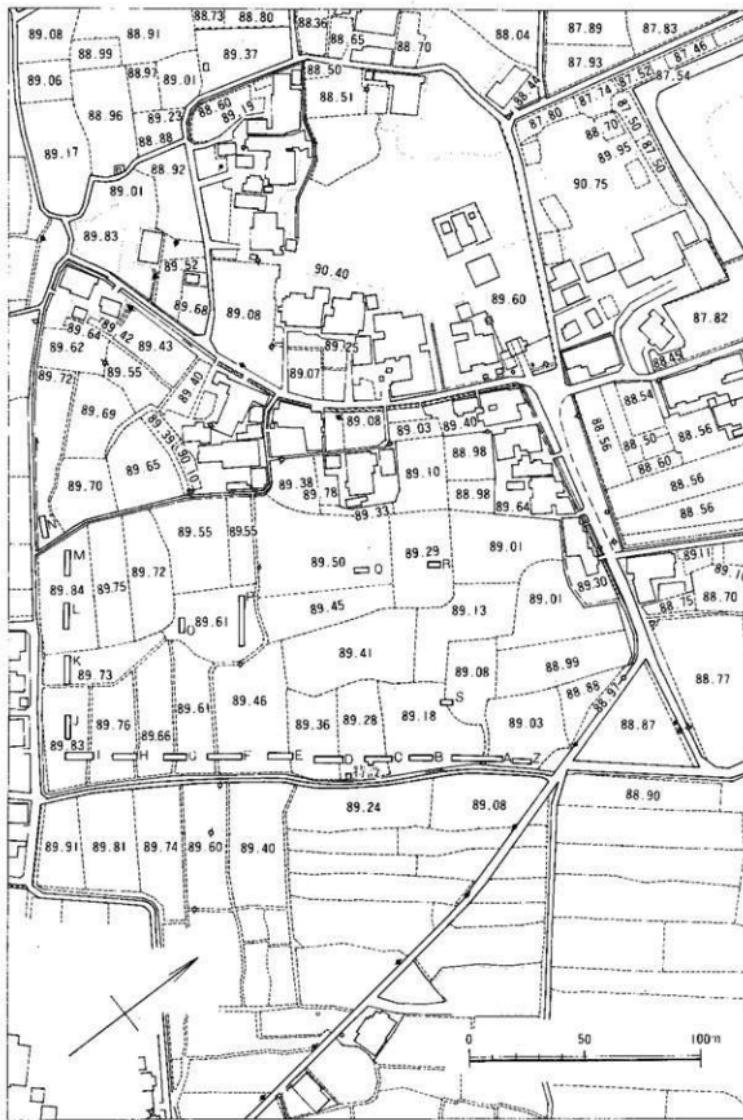
江部遺跡に隣接する菅原神社は、これまでに古瓦の散布が報告されており、白鳳～奈良時代と推定される寺院跡（永原庵寺）の所在が考えられている。また、菅原神社の北東に隣接して、戦国時代から江戸時代に構居として再三利用された永原御殿跡があり、現在も堀の跡が明確に観察できる。さらに菅原神社の南、江部遺跡の西南には、「福泉寺」の字名を残す竹籜がある。現在の福泉寺は、この地点より南東300mに所在するが、兵火によって荒廃したのち、現在地に再興されたといわれている。福泉寺は、応永4年（1397）足利義持の創建になる寺で、『近江輿地志略』によれば「……尤士堂伽藍の地なりといへり、星霜推移衰微に及ぶの上、剝石田三成が兵火に罹りて悉烏有となりぬ。」とある。昭和51年11月、野洲町教育委員会によって、竹籜の周囲で試掘調査が実施され、その結果、中世の遺物が多数出土している。福泉寺と接して、永原氏の菩提所常念寺があり、境内には重要美術品に指定されている鎌倉時代——正応元年（1288）銘の石造宝塔がある。この他にも、江部遺跡の付近には、中世の遺跡の存在を暗示するかのように、多くの石塔や石仏などの石造品が散在しており、将来、中世の遺跡が発見される可能性を含んでいる。

2. 調査の経過

調査の目的 発掘調査は、ほ場整備区域の東側を南から北へ流れる水路の拡張部分が掘削されるため、その部分を中心に調査をすすめてゆく予定であった。しかし、現在使用中の水路や、小さな池などが調査の障害となるため、指定場所にトレーンチを設定して調査を実施することはきわめて困難であった。そのため、水路より西側に約4～10m離れて、水路に平行してトレーンチを設け、発掘を行った。また、ほ場整備によって削平が行われる



挿図1　遺跡位置図



挿図2 トレンチ配置図

各水田については、地下遺構に影響があるかどうかを確認するため、該当する水田にトレーニングを設定して発掘をおこなった。

以上のように、きわめて制約された条件下ではあるが、次の三点に発掘調査の主眼をおいた。

(1) 遺構の有無とその時期

これまでに、遺物が採集されているとはいうものの、包含層、遺構の存在については、けっして明確なものではなかった。また、南側を流れていた家棟川の氾濫を考慮した場合、遺物は上流から押流されてきて、再堆積した可能性も十分に考えられるのである。そういう意味で、包含層の状態、遺構の有無の確認——もしも遺構があった場合の時期決定は、今回の調査に要求された一番の課題である。

(2) 永原廃寺跡との関係

遺構の存在が確認された場合、隣接する普原神社境内に散布する古瓦から推定されている、永原廃寺との関係が問題となる。

(3) 条里遺構の調査

ほ場整備によって、現在まで地表に残されてきた条里制地割に関連するであろう、現在の水路、畦畔については、その時期や構造を知るため、調査によって検討を加えておく必要性がある。

調査の実施 発掘調査は、ほ場整備に先立って、昭和51年11月4日から26日まで実施した。各トレーニングの配置は、第2図に示すように21ヶ所におよんだ。

発掘方法は、包含層上面までバックホウによって排土を行い、その後、人力によって遺構検出作業を実施した。調査は、遺構の検出された面で留めた。また、平面で検出した遺構は、部分的に掘下げ遺構の破損を最小に留めるべく努めた。なお発掘地点の水田は、地表より浸透した水分が壁面からしたたり落ち、また砂層からは、地下水の湧き出しが著しい。そのため、排水溝をトレーニングの四周に掘り、水中ポンプで排水しながら発掘調査を行わなければならなかった。しかしそれでも1トレーニングは、湧水のため壁面が崩れ調査不能となってしまった。調査は、遺構検出、写真撮影、実測の後、排水して埋めもどし旧状に復した。

3. 調査の所見

発掘調査の結果、調査地域のほぼ全域にわたって遺物包含層が認められ、平安時代ごろ

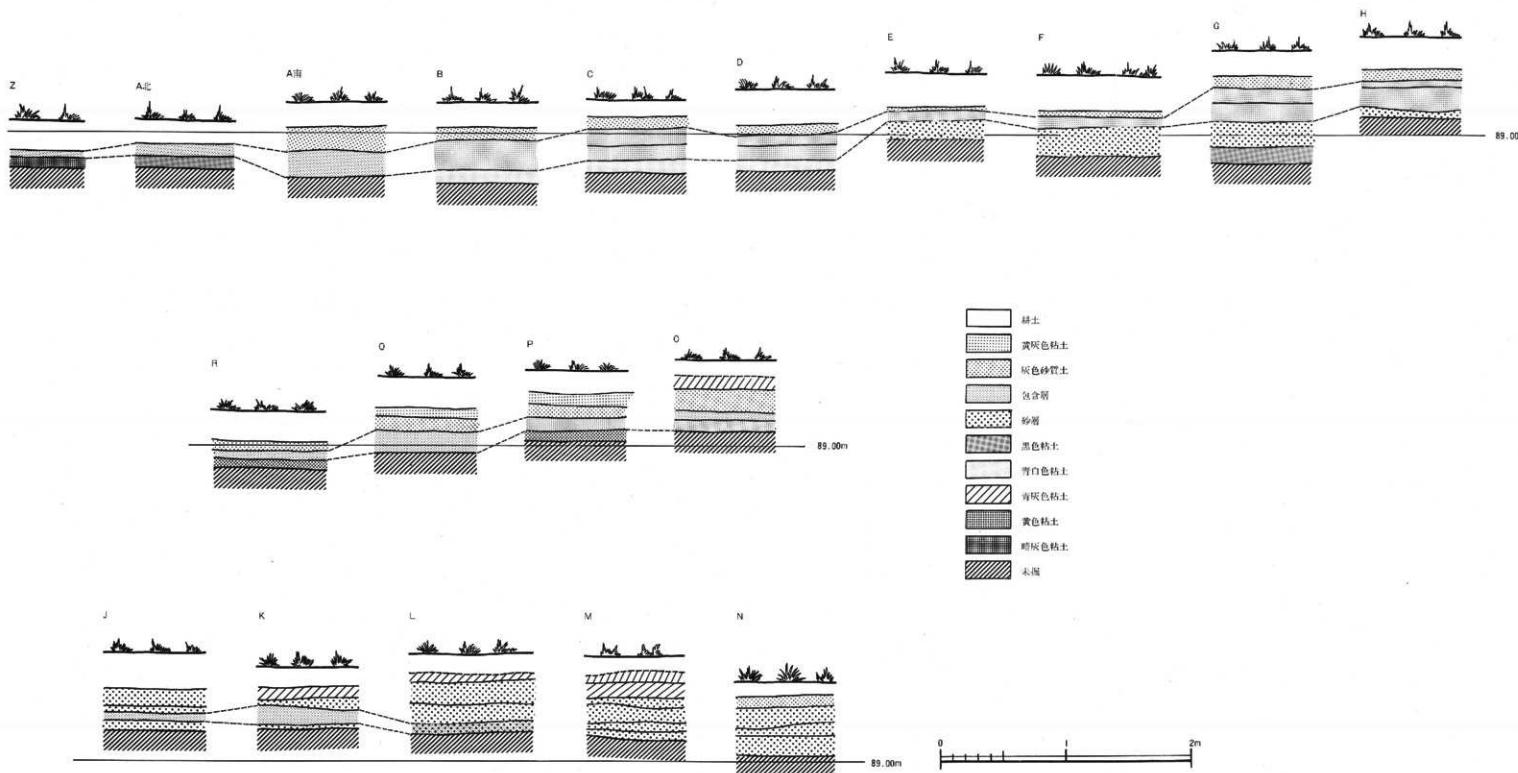


插图3 土层模式图

と推定される掘立柱の建物や溝など、遺構の存在も明らかになった。また、調査地域の南側のトレンチでは、家棟川の氾濫によって堆積したと考えられる砂層が認められ、その中にも遺物が流入して含まれていることが判明した。

(1) 層位

江部遺跡の層位を模式的に組み立てると、挿図3のようになる。この土層モデルから、調査地域内の東側、南側、西側の様相をみてみよう。

東側列 (Z～Hトレンチ)

基本土層は、第I層——表土（耕土と床土の間に明確な一線がひきがたく、両者を同一層としてあつかう。）、第II層——灰色砂質土（ただし、東側列の北側を占めるZ、Aトレンチ北半では認められず、代って黄褐色粘土がある。）、第III層——淡茶灰色砂質粘土（遺物包含層。C、Dトレンチなど場所によっては、下部を暗灰色粘土として、上、下二層に分離できるものもある。）、第IV層 北半——黄色粘土、淡青白色粘土（粘り強）、南半——砂層（流入した遺物含む。）、第V層 南半——黒色粘土（粘り強、遺物含まず。）といった状況を呈している。

第III層の上部、下部、南半の第IV層（砂層）出土の遺物には、明確な時期差は認められなかった。

南側列 (J～Nトレンチ)

基本土層は、第I層——表土（東側列と比較して、明確に床土が分離できるが、便宜上第I層に含めておく。）、第II層——砂層（ブロックを成し、各トレンチで様相を異にする。遺物を含む。湧水著しい。）。

西側列 (O～Rトレンチ)

基本土層は、第I層——表土（東側列よりも床土の分離が明確。）、第II層——灰色砂質土（P、Qトレンチでは、第I層と第II層の間に鉄分の沈着がみられる。）、第III層——暗灰色粘土（包含層）、第IV層——黄色粘土。

西側列の層位は、東側列北半と共通するものであるが、第III層の包含層の土質については、西側列の方が粘質である。また、包含層の厚さも、東側列に比べてやや薄い。

(2) 遺構（挿図4）

(Zトレンチ) 第III層（暗灰色粘土）を掘込んだ、浅い溝状の落込みが2ヵ所と、不整形な橢円形土壤が1基検出された。溝状の落込み内は淡灰色砂質粘土、土壤内は暗青

灰色粘土で、炭化物と土器片が出土した。

溝状の落込みおよび土壙は、明確に遺構であるかどうかは判断しがたい。

(Aトレンチ) 第III層(灰褐色砂質粘土)を掘込んだ溝、柱穴などが確認された。

溝は断面図でみると、ほぼ同じ地点で3回の重複が認められる。第1回目の溝(SD1)は、黒灰色砂質粘土で埋っており、幅1.9m以上、深さ30cmを測る。SD1内からは、須恵器、土師器、黒色土器などが出土した。SD1の廃絶あるいは縮小時に、珪が築かれ、この珪を南側の側面とする溝(SD2)が新たに形成されている。SD2はSD1と同一方向に流れるものと思われるが、灰色を基本色調とした砂質粘土で埋っており、SD1の土色とは明確に異っている。溝の幅は1.8m、深さ45cmを測る。なおSD2内より、土師器、黒色土器、陶器などが出土した。最終期の溝(SD3)は、SD2が廃絶して後にその南側面の珪を利用して、その南にさらに珪を設けて作られたもので、SD1、2と同じ方向を示す。SD3は、現在水田となっているが、地形図や現地の珪畔の状況などから、溝の平面的様相がよくわかる。SD3の形成は、断面図より見て第II層(灰色砂土)堆積以前ということができるが、溝の詳細な時期、出土遺物などについては確認できなかった。

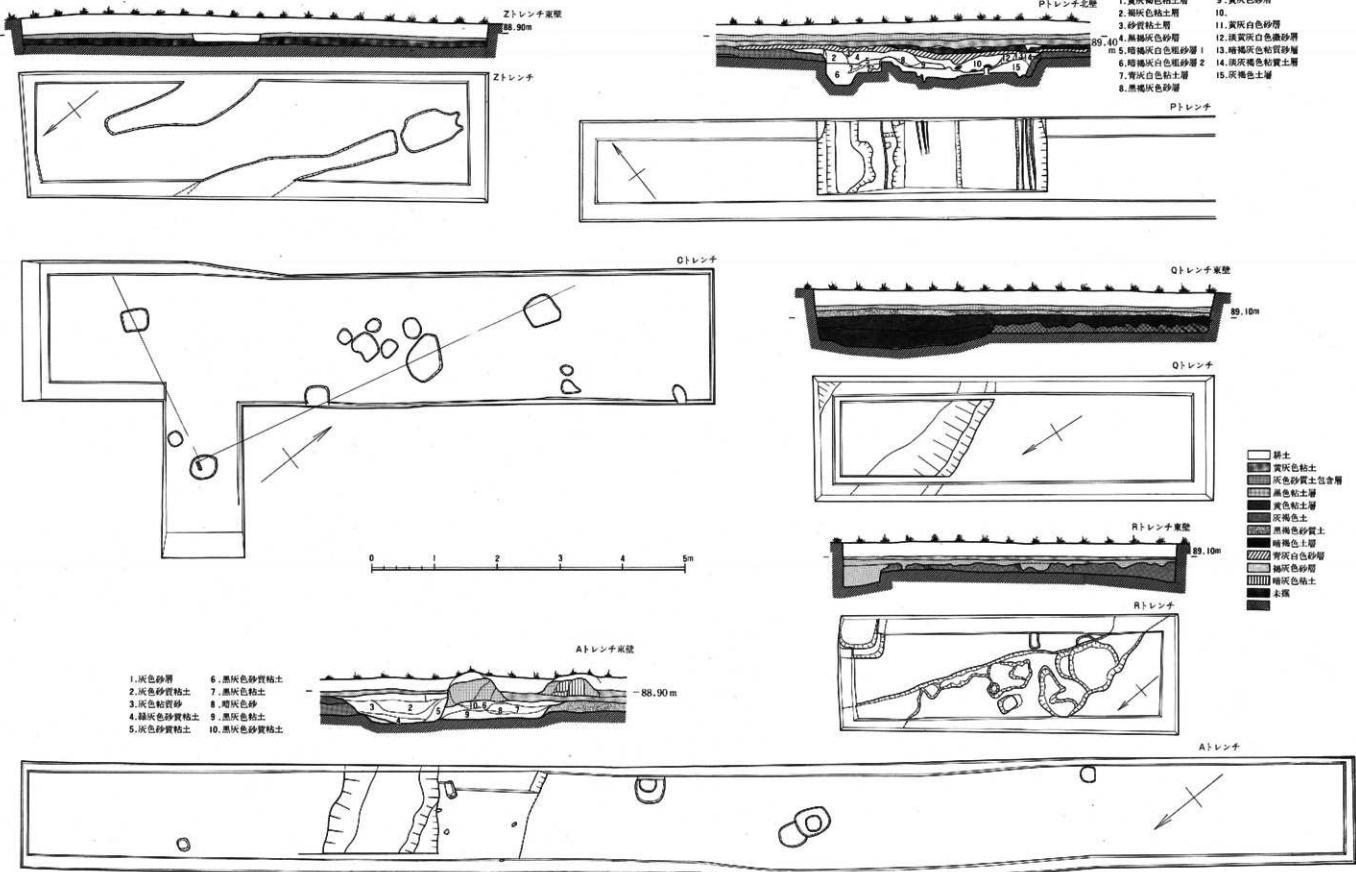
柱穴は、トレンチ内の溝よりも南側で検出された。形態は一辺約50cmの方形を呈し、掘方内に柱の痕跡と思われる直径24cmほどの円形の汚れが認められた。単なるピットと考えるよりも、掘立柱建物の柱穴の一部と考えるのが妥当であろう。なお柱穴については、各トレンチとも完掘せず、輪郭を明示するにとどめている。

(Bトレンチ) トレンチの南端で、第IV層(淡青白色粘土)を掘込んだ、直径20cmほどの円形ピットが2個検出された。(湧水のため実測不能。)

(Cトレンチ) 第III層下部(暗灰色粘土)の包含層を除去した段階で、第IV層(淡青白色粘土)に掘込まれた柱穴と推定される、一辺約40cmほどの方形のピットが検出された。各柱穴の関連からみて、1間(以上)×3間(以上)の掘立柱建物(SB1)の存在が考えられる。なお東南の柱穴には、柱材が残存していた。

柱穴以外にも、トレンチ中央部の土壙より、須恵器や土師器の小破片がまとまって出土した。この土壙内出土の遺物は、第III層の包含層中出土の遺物よりも、いくぶん古い様相を持ったものである。

(Pトレンチ) 黒褐色粘土を掘込んだ溝が検出された。溝の幅は4mで、東流と西流の2本の流路が認められる。西流は、流路の東側面に、平行した2本の狭い溝が走る。溝の壁面を保護するため、板でも打込んでいた痕跡であろうか。この両側面に沿った小溝間で求められる溝の幅は1.9mで、深さは35cmを測る。東流と西流は、黄色粘土層を整形した幅35cm、高さ18cmの土手によって区切られている。西流は、幅90cm、最深部56cmを



挿図4 遺構実測図

測る。西流の両側面はほぼ垂直に掘込まれており、溝の西側のみ幅45cmでU字型に深く窪んでいる。両水路の埋没状況からみて、最終的には東流のみが、しだいに浅くなりながら最後まで流れているようである。溝内出土の遺物は少なく、土師器、須恵器片が若干出土した。

(Qトレンチ) 包含層の第IV層を除去すると、第V層（黄色粘土）を掘込んで、幅2.5m以上、深さ20cmの大きな落込み（溝か？）が検出された。落内の土は、第IV層とは若干異ったやや砂質気味の黒褐色粘質砂で、掘込みは第VI層（淡青灰色シルト）にまでおよぶ。この第VI層より湧水。

(Rトレンチ) Qトレンチ同様、第IV層（黄色粘土）を掘込んだ遺構が検出された。遺構はトレンチ北東端に幅約80cm、深さ38cmの方形の土壙が認められる。土壙内の土は、第III層の土と同質であるが、前者の土の方がややマンガン分が多く黒味をおびている。またこの他に、南北方向に走る、浅い底の凹凸の著しい幅1mほどの溝状の落込みが検出された。しかし、溝内の土は第III層の土と大差なく、明確な遺構と言うよりも、むしろ自然な落込みとも考えられる。ただ溝内から、斜めに掘込まれた直径約20cm程の黒褐色粘土の充満した小さなビットが検出された。なお、溝、ビット共に遺物の出土量は多く、ビット内からは木片が出土している。

(3) Sトレンチ、特設トレンチ

(Sトレンチ) Aトレンチによって切断されたSD3がとりつく水田で、他の水田にくらべてやや不整形である。畦畔の曲り具合などから、池跡ではないかと推定されるものであった。そのため、水田の畦畔の南側を切断するような形でトレンチを設け、池の端を知ろうと試みた。しかし、結果としては、池の端と思われるような遺構を、トレンチ内で発見することはできなかった。ただ、他のトレンチとはやや異った土層を明らかにしたとはいものの、池としての十分な確証は得られなかった。

(特設トレンチ) ほぼ直進する現行の水路に、一部曲っている部分があるため、水路の旧状を確認するべくトレンチを設けた。耕土を除去すると、まず現在の溝の延長線上に、幅65cm、深さ12cmの新しい溝が検出された。また下層で、暗灰色粘土を掘込んだ溝状の落込みを確認した。

(4) 畦畔の構造（挿図5）

比較的断面の明確な畦畔のみを図示する。調査した各畦畔に共通して言えることは、

「1. 層位」で見た基本層位の第II層上、あるいは第IV層上に築造されていることである。これによって畦畔の築造時期は、包含層の推積後の所産と考えられる。時期としては、包含層の年代が、出土遺物から平安時代末から鎌倉時代と推定されることから、現在地表に残る畦畔はそれ以降のものといえよう。

4. 出 土 遺 物 (図版 9~13)

土師器 坯、皿、小皿、台付皿、塊、羽釜などが主に出土している。また、これ以外には、若干器種の異ったものの破片が認められる。

出土破片の総数から器種構成を見ると、塊：坯・皿：釜（煮沸容器）の割合は、概ね10:4:1となる。ただし、資料が小破片であることと、塊の場合、黒色土器が磨滅して炭素の剥れたものが含まれていることを加味せねばなるまい。しかし、塊の出土数を土師器と黒色土器で比較すると、約2:1となり、土師器塊がかなり使用されていたことが推測される。

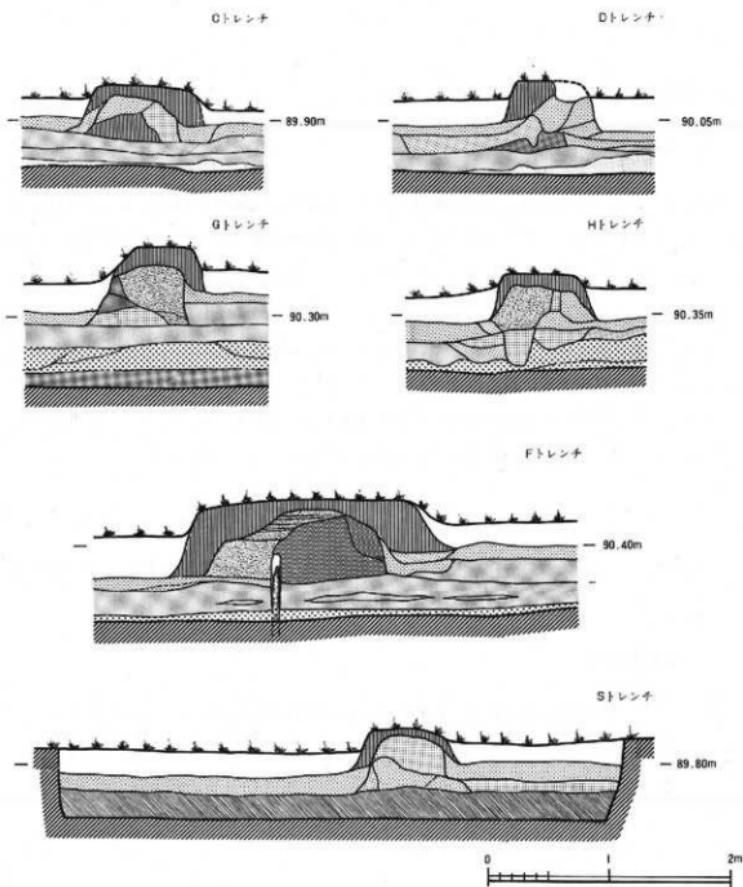
黒色土器 この黒色土器は、畿内で平安時代に使用された黒色土器とは異なるもので、これまでの調査から、畿内の瓦器に併行する遺物と考えられている。器形は畿内の黒色土器や瓦器の塊と比較するとむしろ瓦器に近いが、炭素は内面と口縁部外面に黒漆状に付着しており、瓦器よりも黒色土器に近いものである。器種は塊と小皿があるが、量的には塊が大半を占める。塊は、器高の違いから2種に分類できるが、他に著しい相違はない。また、内面のヘラ磨き部分に炭素が付着せず、素地の認められる例も比較的多かった。

須恵器 坯、壺、甕、摺鉢などが出土しているが、C、Dトレンチの包含層下部で比較的まとまって出土している。

瓦 E、Qトレンチで各1点、Pトレンチで2点出土した。瓦は磨滅しているが平瓦で、裏面——凸面は格子目印文、内面——凹面は布目が認められる。急調は黄白色。

陶磁器 いずれも小破片であるが、製品は多様である。包含層中からは、G、Jトレンチで青磁、青白磁が3点、Gトレンチで国産磁器1点、E、J、Qトレンチからは陶器が各々1点ずつ出土している。またCトレンチ畦畔から、信楽の摺鉢が1点出土しており、畦畔の上限を考える際の資料となろう。

その他に、G、Q、Rトレンチの包含層から土師質の土錐が3点。Rトレンチの包含層(溝状の落込み)から、フイゴの小破片が若干出土している。



耕土
黄灰色粘土層
灰色砂質土層
包含物
砂層
黑色粘土層
青白色砂質土層
灰色土層

灰褐色土層
茶灰色砂質土層
淡褐色砂質土層
淡褐色土層
黑灰粘土層
未測

挿図5 畦畔断面図

5. 結び

今回の調査によって、以下のような結論を得た。

(1) 遺構の有無とその時期

発掘調査によって包含層、遺構を確認できたことから、家棟川の氾濫によって遺物が押流され再堆積したという考えは訂正し得た。ただ遺跡の時期については、包含層中の遺物が、C、Dトレンチの包含層下部に見られるように須恵器を多く伴うやや古相を呈するものがあることなどから、大きく2時期に大別できよう。須恵器を伴出する下部を、平安時代前期、包含層全体を土師器、黒色土器などから平安時代後期と推定される。しかし、包含層の年代も、黒色土器に器高の違うものが含まれていることや、作りの雑な整形の単純な土師器小皿など、やや細分の可能性を示す要素も認められる。だが、こうした問題点を考慮にいれたとしても、鎌倉時代前期を下るものではないと言える。

(2) 永原廃寺との関係

菅原神社に近い西側例のトレンチから4点瓦が出土したが、寺院跡を推測させる遺構は検出されなかった。おそらく寺域外であろうと推定される。

(3) 遺跡の性格

1. 2で見てきた結論と遺構より判断して江部遺跡は平安時代の集落と考えられる。

(兼康保明)

表1 遺物観察表

番号	器種	形態の特長	手法の特長	法量 cm	色・調	胎土	焼成	備考
1	皿 (土師器)	口縁部と体部の境に鋸い縁をもつ。口縁部は外反する。 底部は欠損。	口縁部外面から体内部面にかけられて横ナデ。	口径 11.4 窓溝 2.4	外面・暗褐色 内面・黑色	良 微砂を含む U。	焼成 Zトレンチ包合層	底部 十強
2	皿 (土師器)	平らな底部で、口縁部は外反する。 底部欠損。	口縁部外面から体内部面にかけられて横ナデ。 底部外面は不調整。	口径 8.8 窓溝 1.7	淡黄褐色 U。	良 微砂を含む U。	焼成 Aトレンチ包合層	底部 十強
3	皿 (土師器)	やや凹み気味の底部から斜め上方へ口縁部のはびる。 底部欠損。	口縁部外面から体内部面にかけられて横ナデ。	口径 8.4	淡茶褐色	砂粒を若干含む。 軟	焼成 Bトレンチ包合層 表面剥離のため手法は不明	底部 +
4	皿 (土師器)	丸味をおびた底部から、口縁部は斜め上方へのびる。 底部欠損。	口縁部外面とともに横ナデ。 底部外面は不調整。 口縁部と底部の境に粘土のつぎ日が認められる。	口径 8.4	黄褐色	砂粒を含む。 軟	焼成 Aトレンチ包合層	底部 十弱
5	皿 (土師器)	丸味をおびた底部から、口縁部は斜め上方へのびる。 底部欠損。	口縁部外面から体内部面にかけられて横ナデ。	口径 6.2	暗褐色	良 砂粒を含む。 軟	焼成 Fトレンチ包合層	底部 +
6	皿 (土師器)	口縁部と体部の境に縁をもつ。 口縁部は外反する。 底部欠損。	口縁部外面から体内部面にかけられて横ナデ。 底部外面は不調整。	口径 14.0	白黄色	砂粒を若干含む。 軟	焼成 Aトレンチ北削包合層	底部 +
7	脚付皿 (土師器)	浅い体部に脚をつけたものの、口縁部は欠損。	口縁部外面から体内部面にかけられて横ナデ。	口径 17.7	暗褐色	砂粒をや や多く含む U。	焼成 Zトレンチ包合層 表面剥離のため手法は不明	底部 +
8	椀 (黒土器)	内輪気味にのびる口縁部をもつ。 内部前面に…えの沈縁をもつ。 底部は欠損。	口縁部外面から体内部面にかけられて横ナデ後に跳躍。 体部前面は横ナデ後には不調整。 内部前面を施す。	口径 14.9	淡黄褐色口 縁部外面から 全体前面か らは黒色	良	焼成 Aトレンチ包合層	底部 +
9	椀 (黒土器)	高台をもつ底部である。 口縁部は欠損。	高台部は張り付け後、横ナデ。 高台部は張り付け後、横ナデ。	口径 6.8	淡黄褐色	良	焼成 Aトレンチ包合層	底部 +
10	杯 (須恵器)	高台をもつ底部である。 口縁部は欠損。	高台部は張り付け後、横ナデ。 底部とともにクロナデ。	口径 8.0	淡灰色	良	焼成 Aトレンチ包合層	底部 +
11	壺 (須恵器)	高台をもつ底部である。 高台はやや外に開き、内縁部に縫をもつ。 口縁部、体部ともに欠損。	底部外面は張り付け後、横ナデ。 高台部は張り付け後、横ナデ。	底径 9.4	外面・灰白色 窓溝は黒	硬 味を帯びる	焼成 Bトレンチ包合層	底部 +
12	皿 (土師器)	凹んだ底部から、大きく外反する口縁部をもつ。 底部は欠損。	口縁部外面から体内部面にかけられて横ナデ。 底部外面は不調整。	口径 16.6 窓溝 2.1	黄白色	精良 軟	焼成 Cトレンチ包合層 下層	底部 十強 中央ピット

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	法量cm	色調	粘度	焼成	備考
13	杯蓋 (銀器)	口縁部は太粗、 扁平なつまみの頂部がわざかに 突出する。	つまみは横ナデ。 天井部外表面はロクロナダ、内面 はナデ。		灰色	白色の砂 粒を含む	硬	残部 Cレンチ包含層 下層
14	蓋 (銀器)	あ味をおびた天井部をもち、輪 部は短く削曲する。	天井部外表面から内面にかけてロ クロナダ。	口径 13.6	暗灰色	白色の砂 粒を含む	硬	残部 Cレンチ包含層 下層
15	蓋 (銀器)	大きく開く頭部から口縁部には 上下来反する。口縁端部は 内外面ともにロクロナダ。	ロ縁部内外面ともにロクロナダ。	口径 26.0	灰色	白色の砂 粒を含む	やや軟	残部 Dレンチ包含層 下層
16	蓋 (銀器)	大きく開く頭部からロ縁部には (?)水平に外反する。ロ縁端部は厚 く立ち上がる。口縁端面にかけ て凹線をもつ。	ロ縁部内外面は切きと思われる。 ロ縁部は斜面から首部外面向にかけ て傾かれており、 首部は張り付け後横ナデ。 底部(?)外側とともにロクロナダ。	口径 20.8	明灰白色	白色・黒 色の砂粒 を含む。	硬	残部 Dレンチ包含層 下層
17	蓋 (銀器)	高台をもつ底部である。	底部は張り付け後横ナデ。 底部(?)外側とともにロクロナダ。	底径 7.6	内面・外色 色	白色の砂 粒を含む	やや軟	残部 Dレンチ包含層 下層
18	蓋 (銀器)	高台をもつ近底部である。	底部は張りつけ、高台部を張り 付け。底台部は横ナダ。	底径 8.0	灰色	外面・淡黒 色	硬	残部 Dレンチ包含層 下層
19	楕 (黒色上器)	内部氣味にのびる(体部から)、口 縁部は突出し、口縁部は丸く おさめる。口縁部内面に一絆 端部をもちつ。	ロ縁部外表面から体部内面にかけ て横ナデ。体部内面は施墨し、 端文を施す。外面は不調整。	口径 16.8	内面・黑色 色	若干の白 色砂粒を 含む。	硬	口縁部 Nレンチ包含層 下層
20	皿 (土師器)	門んだ底部から外反する口縁部 をもつ。口縁端部を大きく外 させると、口縁端部は立ち上 げられる。	ロ縁部外表面から体部内面にかけ て横ナデ。底部外表面は不調整。	口径 器高 1.8	淡黄褐色	白色砂 粒を含む。	硬	残部 Mレンチ包含層 下層
21	羽釜 (土師器)	内傾する頭部から曲折して立ち 上がる口縁部をもつ。	ロ縁部内外面ともに横ナデ。	口径 18.8	暗黃褐色	白色砂 粒を含む	やや硬	残部 Hレンチ ロ鉗外側に塗付着 下層
22	蓋 (銀器)	大きく外反するロ縁部である。 ロ縁端部は上方へ立ち上かる。	ロ縁部内外面ともにロクロナダ。 外面には部分的に縱ナデ。 が認められる。	口径 23.2	色 色	若干砂 粒を含む。	硬	残部 Nレンチ 口縫が大きくなる 可能性あり。
23	楕 (黒色上器)	内部氣味にのびるロ縁部をもつ。 ロ縁端部内面に一絆の沈模をめぐ らせる。 ロ縁端部は丸くおさめる。	ロ縁部内外面ともに横ナデ。 体部内面は斜め方向に研毛調整。 後部削きし、陶文を施す。 体部外表面は不調整。	口径 15.2	内面・黑色 色	やや軟	残部 Rレンチ 溝	

番号	器種	形態の特徴	手注の特長	法量 cm	色調	胎七	焼成	備考
24	楕(黒色土器)	内側が味に大きく開く口縁部をもち、口縁部外面から体部内面にかけで構なす。底部は欠損。	口縁部外面から体部内面にかけで構なす。体部内面には施墨を施す。	口径 14.8 高さ 14.3	内面・黒褐色 外面・黄褐色	良	やや軟	後部 Rレンチ包含層
25	楕(黒色土器)	内側が味にのびる口縁部である。口縁部内面に一条の沈線をもつ。底部は欠損。	口縁部外面は構ナダ。外面に部分的に横方向の肥厚しが認められる。体部内面には刻毛調跡後、肥厚を施し、暈文を施す。体部外面は不調跡。	口径 13.6 高さ 15.7	内面・黒褐色 外面・淡黃褐色	良	硬	後部 Rレンチ包含層
26	楕(黒色土器)	内側が味にのびる口縁部をもち、口縁部内面には施墨をもつ。底部は欠損。	口縁部外面は構ナダ。口縁部内面には施墨を施す。暈文を施す。体部外面は不調跡。	口径 15.7 高さ 14.6	内面・黒褐色 外面・淡黃褐色	良	やや軟	後部 Rレンチ 構内ビット
27	羽茎(土師器)	内側してのびる口縁部をもち、羽茎は周部最も多く、中央部よりも少しこい。	口縁部内面は周部から中央部に至るまで横筋をもつ。体部内面には横い時毛印が残る。体部外面は不調跡。	口径 14.6 高さ 7.9	暗褐色 淡黃褐色	良	やや軟	後部 Rレンチ包含層
28	楕(土師器)	丸味をおびた底部から大きく外反する口縁部をもつ。底部は欠損。	丸味をおびた底部から、外反する口縁部をもつ。口縁部内面には施墨を施す。底部は欠損。	口径 16.3 器高 1.25	淡赤褐色	精良	軟	後部 Rレンチ包含層 表面剥離のため手取不規
29	楕(土師器)	わずかに凹んだ底部から、外反する口縁部をもつ。口縁部内面には施墨を施す。底部は欠損。	口縁部外面から体部内面にかけで構ナダ。口縁部外面は不調跡。全体的にはいいねいなつくりである。	口径 13.6 高さ 7.8	淡赤褐色	若干の砂粒を含む	やや軟	後部 Rレンチ包含層
30	楕(黒色土器)	内側が味にのびる口縁部をもち、口縁部内面に一条の沈線をもつ。底部は欠損。	口縁部外面から体部内面にかけで構ナダ。底部に窓口のはがれた痕跡がある。	口径 14.5 高さ 14.5	白黒色	精良	硬	後部 Rレンチ溝
31	提柄(須恵器)	口縁部は直角的に、外上方へのびる。口縁部外面のはげ部位に一束の凹縫をめぐらせる。	口縁部外面ともにロクロナデ。	口径 7.8 高さ 7.8	灰黑色	良	硬	後部 Qレンチ包含層
32	楕(黒色土器)	内側が味に大きく開く口縁部をもち、口縁部内面には新方向の跡毛調跡後、施墨を施し、暈文を施す。底部は欠損。	口縁部外面ともに構ナダ。体部内面には新方向の跡毛調跡後、施墨を施す。体部外面は不調跡。	口径 14.5 高さ 14.5	白黒色	精良	やや硬	外部 Aレンチ SD2土層

番号	器種	形態の特長	手 法 の 特 長	法量 cm	色 調	胎 土	燒 成	備 注
33	楕 (黒土器)	内壁気味に大きく開く口縁部をもつ。口縁部は内外面ともに擦ナナデ。底部内部に一条の沈線をもめぐらせる。底部は欠損。	口縁部は内外面ともに擦ナナデ。体部内部は磨きし、研磨を施す。口縁部をさらに口縁部をもつ。口縁部内部は磨きし、研磨を施す。底部内部に一条の沈線をもつ。口縁部内部は磨きし、研磨を施す。底部は不調整。	口径 15.3 高さ 15.3	内面・黒色 外面・白黄色	良	やや軟 Aトレンチ SD2 上層	底部占 Aトレンチ SD2 上層
34	楕 (黒土器)	内壁気味にのびる口縁部をもつ。口縁部をさらに外反させる。底部は張り付ける。底部は欠損。	口縁部内部は磨きし、研磨を施す。底部内部は磨きし、研磨を施す。底部内部は磨きし、研磨を施す。底部は張り付ける。底部は欠損。	口径 14.7 高さ 14.7	内面・黒色 外面・白黄色 褐色	良	やや軟 Aトレンチ SD2 上層	底部占 Aトレンチ SD2 上層
35	楕 (黒土器)	低い高台をもつ底部である。	底部内部は擦ナナデ後、肥厚し、端文を施す。底部は不調整。底部は張り付ける。底部は欠損。	口径 6.1 高さ 6.1	内面・白色 外面・白黄色	良	軟 (内面硬)	底部占 Aトレンチ SD2 上層
36	圓 (土師器)	丸をねじた底部から、口縁部は屈曲して外反する。口縁部と底部の境に棱をもつ。底部は欠損。	口縁部外側から体部内部にかけて擦ナナデ。底部外部は不調整。底部内部は磨き目を残す。	口径 8.8 高さ 8.8	淡黄褐色	良 微砂を含む。	やや軟 Aトレンチ SD2 上層	底部占 Aトレンチ SD2 上層
37	圓 (土師器)	平らな底部から、ゆるく外反する。口縁部をもつ。	口縁部外側から体部内部にかけて擦ナナデとと思われる。底部外部は不調整。	口径 8.2 高さ 8.2	黃褐色	良 微砂を含む。	やや軟 Aトレンチ SD2 上層	底部占 Aトレンチ SD2 上層
38	圓 (土師器)	平らな底部から曲折して外反する。口縁部をもつ。	口縁部外側から体部内部にかけて擦ナナデ。底部外部は不調整。	口径 8.3 高さ 8.3	黃褐色	良 微砂を含む。	やや軟 Aトレンチ SD2 上層	底部占 Aトレンチ SD2 上層
39	圓 (土師器)	丸い底部から、曲折して外反する。口縁部をもつ。	口縁部外面から、体部内部にかけて擦ナナデとと思われる。底部外部は不調整。	口径 8.0 高さ 8.0	黃褐色	良 微砂を含む。	やや軟 Aトレンチ SD2 上層	底部占 Aトレンチ SD2 上層
40	蓋 (灰土器)	大きく開く底部から、ほぼ水平に近く口縁部を外反させる。口縁部は上下に肥厚させる。	内外面ともロクロナナデ。頸部内部に指圧痕を残す。底部外部は不調整。	口径 26.4 高さ 26.4	外面・灰色 内面・暗灰	白色の大 きな砂粒	硬 Aトレンチ SD2 上層	底部占 Aトレンチ SD2 上層
41	焼 (土師器)	円錐部はあまり大きく外反しない。口縁部をわざかにつまみ出す。	口縁部は内外面ともに擦ナナデ。体部内部は擦毛日を残す。底部は不調整。	口径 24.1 高さ 24.1	内面・黑色 外面・暗褐色	白色多く含む。	やや軟 Aトレンチ SD2 下層	底部占 Aトレンチ SD2 下層

番号	器種	形態の特長	手法の特長	法量cm	色調	胎土	焼成	備考
42	盞(頭・底) 器	扁平な大井部から、口縁部は直曲する。 口縁端部は短く直立する。	内外面ともにロクロナデ。 口縁部は灰かぶり。	口径 9.0	青灰色 断面は、暗 紫色	粘質 粘性	硬	残部 Pトレンチ 東洋灰下層 鉛鉱砂
43	(土) 飾器	丸味をおびた体部をもつ。			灰色	負 微砂、金 雲母を含 む。	硬	残部 Pトレンチ 東洋灰下層 鉛鉱砂 内外面とも表面剝 離が著しく、調整 手法不明。
44	杯蓋(頭・底) 器	扁平な大井部から、口縁部は曲 折する。 口縁端部は短く直立する。 頂部は欠損 半らな底部から大きく開く口縁 部をもつ。	口縁部外面から内面にかけて口 クロナデ。 大井部外面はナデ。 底部は欠損 やや内凹味に外反する口縁部 である。	口径 12.8	灰色	負 白色砂粒 を含む。	硬	残部 Pトレンチ 東洋灰下層 黒ね地が残る。
45	杯(頭・底) 器		内外面ともにロクロナデ。	口径 12.8	内面・青灰 色 外面・灰色	良	硬	残部 Pトレンチ 灰色地に層
46	(土) 飾器	口縁端部は内側で翫厚にする。	内外面ともに横ナデ。	口径 18.0	暗黄褐色	砂粒を含 む。	やや軟	残部 Sトレンチ 黑色粘土層
47	盞(土) 飾器	大きく開く口縁部をもち、口縁 端部は曲折して立ち上る。	内外面ともに横ナデ。	口径 9.6	淡灰色	良	やや軟	残部 Pトレンチ 表土層

第5章 犬上郡多賀町水沼莊跡遺跡

1. はじめに

正倉院に残された東大寺莊園絵図の一帳に天平勝宝3(751)年の「東大寺領近江国水田地図」があるが、この内の「水沼村三十町」の推定地である犬上郡多賀町敏満寺地先が、團体営のは場整備事業対象地となっていることを知ったのは昭和50年の夏頃であった。

その計画は大部分が地均工事であったが、絵図の中央に記された水路以南の地と思われる部分については、一現在微高地となっているが、削平される予定であった。しかも、この微高地上からは桑伐根のおり遺物の出土が報じられていたため、その後、数回に渡り地元敏満寺土地改良組合、町関係機関と協議を重ねた結果、

1. 小字高畠地区的畠地を中心に発掘調査を2ヶ年に渡り実施すること。
2. この調査結果にもとづき造成すること。

で協議が整のい、既に施工年度別に工区が定まっていた工事の年度計画を大幅に変更することとなった。

調査は本委員会文化財保護課技師近藤滋が担当し、現場主任は松沢修氏に願い、田中政明(滋賀大O.B.)、山口利彦(滋賀大)、上田完二(竜谷大)、岩崎茂(京都産大)氏等の協力を得た。また、地元においては調査全般に渡り種々御世話頂いた、ほ場整備組合理事長種村義平氏をはじめ役員諸氏、敏満寺区長吉川佐太郎氏と、町長林清一郎氏をはじめ町教育委員会の諸氏に多大の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

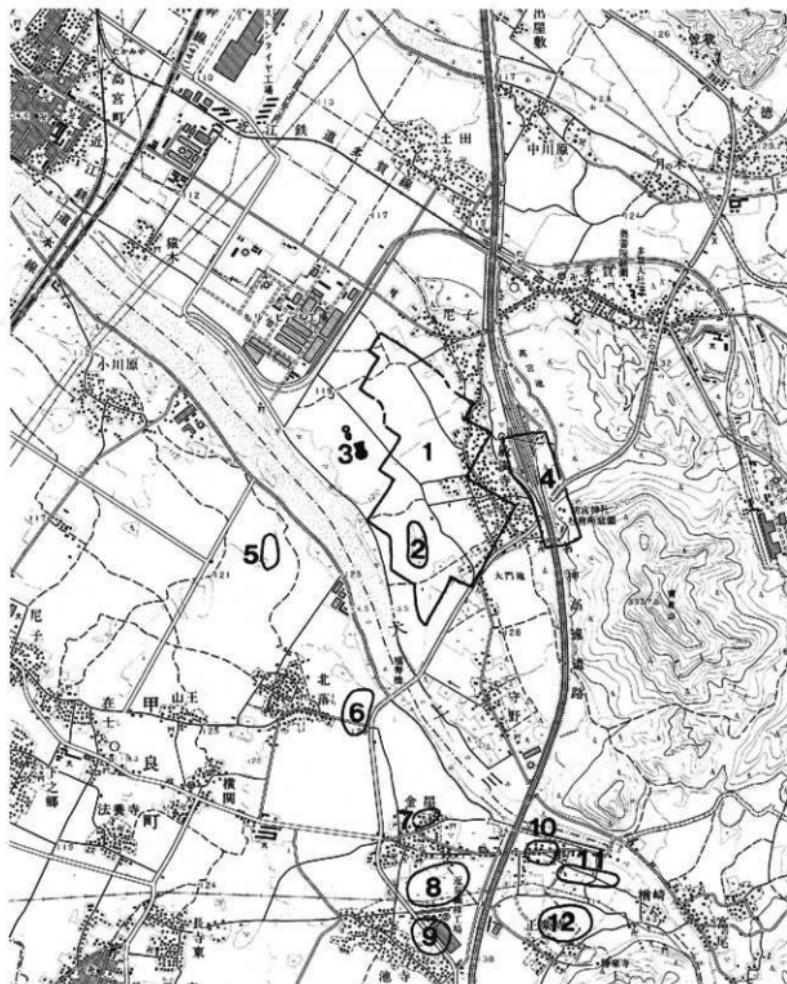
なお、最後に図版の一部に弥生貞三氏著、「奈良時代の貴族と農民」(至文堂)に掲載の図を使用させて頂いたことをここに明記しておく。

2. 位置と環境

当該調査地点は谷岡武雄、弥生貞三両氏により、その荘域を推定された水沼荘の南東部で古絵図の荘域中央に記された流路の南にあたる。現況は周辺部田面と比高2m程度の微高地となっており、犬上郡多賀町敏満寺小字高畠地先で、国道307号線が犬上川と交叉する点の北0.5kmに位置している(第1図)。

この微高地は犬上川の旧扇面で、その西は犬上川により側方侵蝕され、南は二ノ井幹線水路により開削され、東から北にかけては、猿木川により開削された南北の狭長な台地を呈している。そして附近には、古絵図に示されているような条里痕はなく、旧状を知り難いが、水沼池(現在の大門池)、池尻田(現在の池尻)、荘域中央の流路、そして背景に描かれた山など、古絵図の景観を物語るものも少なくない。

次に周辺の他遺跡としては大部分が古墳で他にあまり知られていない。まず当微高地の



挿図1 遺跡位置図

- | | | | |
|-----------|--------------|-----------|------------|
| 1. 推定水沼莊域 | 2. 高畠地区 | 3. 大塚古墳 | 4. 敏満寺跡 |
| 5. 塚原古墳群 | 6. 北落古墳群 | 7. 金屋北古墳群 | 8. 金屋南古墳群 |
| 9. 外輪古墳群 | 10. 金屋遺跡(縦文) | 11. 檜崎古墳群 | 12. 正樂寺古墳群 |

北端、高畠地区から0.5kmの所に大塚古墳がある。この古墳は、現在では石室周辺に若干の封土を残すだけで、石材は露頭し、一見円墳のようであるが、明治6年の字限図によると長方形の荒地となっており、さらに、石室部の北20mの位置に柿の木を持つ若干の微高地があり、この削り残し断面を観察の結果、明らかに石室周辺と同様、人為的に盛土した痕跡があるため、本来は北に前方部を持つ、全長25m程の後期前方後円墳であることが判明した。また、この周辺には、かつて2~3基の円墳があって、小古墳群を形成していたらしく、開墾の際に直刀片や土器片の出土が伝えられている。

水沼荘を中心とした犬上川右岸では、この大塚古墳群以外に、現在では古墳が認められていないのに反し、対岸の左岸側では多賀町樋崎、甲良町正樂寺、金屋北・南、外輪、北落、塚原と目白押しに古墳群が並び、対象的な歴史的景観を示している。内でも北落古墳群は前方後円墳を中心として5基からなる後期古墳群で、大塚古墳群と同様の存在形態を示している。

次に時代は若干跳ぶが、大字名の示すとおり、当遺跡の0.5kmの丘陵上で、現在の名神高速道路多賀サービスエリアのところから胡宮神社にかけての一帯に、聖徳太子創建伝承を持つ敏満寺跡がある。当初草堂的なものであったのが、平安時代中期の9世紀末葉から10世紀前半頃に大寺と化し、鎌倉以降大いに繁栄した。そして元亀3年(1572)、織田信長により堂塔・坊舎を残らず焼かれ、所領もすべて失い現在に至っている。昭和35年、名神高速道路建設に先立ち調査され、仁王門跡などが確認、保存されているとともに、胡宮神社境内一帯に坊跡が残されており、昔時の繁栄振りが忍ばれる。

3. 遺構

先にも述べたように、当遺跡は昭和35年に谷岡武雄、弥永貞三氏らにより、歴史地理、文献等の面から調査され、一部発掘調査も実施されている。この結果、犬上郡条里の復原とともに水沼荘域が推定されたのである。

今回の調査は両氏の調査結果にもとづき、かつ、ほ場整備側の造成計画、桑伐根の際の遺物出土等から、高畠地区の遺構の遺存状況、広がり、性格を知ることを目的として、昭和51年7月16日より9月末日まで調査を実施した。

調査は、まず台地中央を略南北に流れる用水路の西から始め、この水路と直交する小水路の北、中央水路の東と順次掘り広げ、遺構の範囲を追った。この結果、中央水路の東は幅約8.5mの旧流路と性格不明の落ち込みがあるだけで、ほとんど遺構はなかった。また、中央水路に直交する東西水路以北も、まったく方位を異にする幅0.5mの2条の溝が交叉し

て検出されただけで、その更に北は0.7m程の段を持って田となっている。このため調査は、T字型に流れる現況水路の南西部を中心に実施し、合計16ヶ所、約700m²を掘り、高畠地区全体の概略を知り得たのである(第2図)。

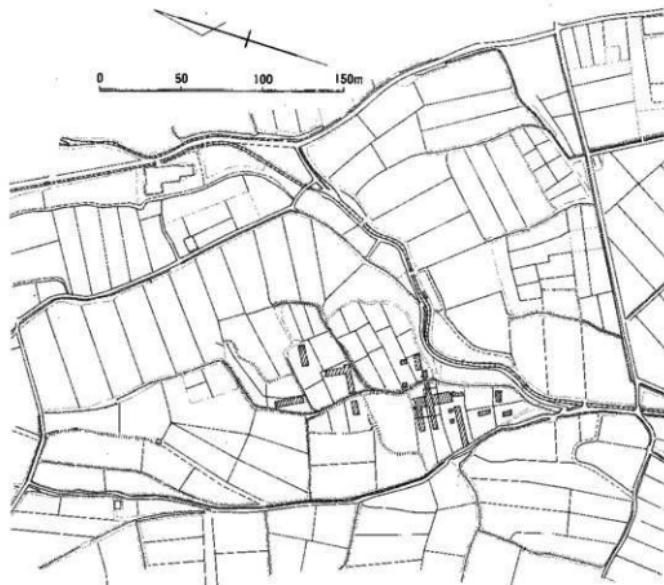
次に検出された遺構を順次概略してみる(第3・4図)。

掘立柱建築跡

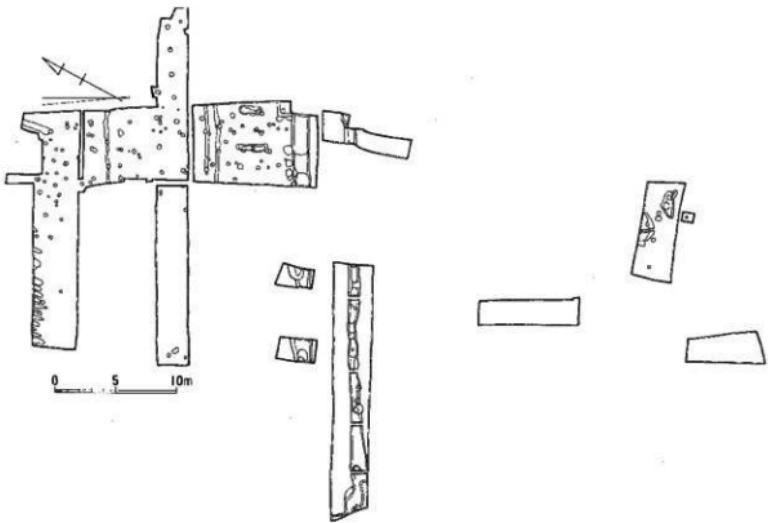
合計6棟分の建物跡があり、この内1棟は方位も、まったく異なり、2間の南妻が確認されただけで棚の可能性もある。ここでは比較的明確な建物跡5棟について概要を述べるに止めたい。

まず、この5棟の建物跡は方位の違いにより大別して3時期に分けられる。SB01・SB02とSB03、そしてSB04、SB05の3期である。

SB01 東西に棟を持つ2間×1間(4.2×2.1m)以上の建物で西妻が確認されており、あるいは倉庫様の建物になる可能性がある。また建替えが一度なされている。



挿図2 地形およびトレンチ配置図



挿図3 遺構平面図

SB02 SB01の北10mに位置する2間以上×2間以上(4.5m以上×4.5m以上)以上の建物で、建替えが一度なされている。

SB03 SB01に重複し、時期の異なる建物で平側より妻側の方が広く、南北に庇を有する4間×2間(7.8m×6.4m)の規模を持つ住居様のものである。なお庇は南が北に比して若干狭いところに特徴があり、建替が一度やや、狭くしてなされている。

SB04 SB02に重複する建物で、その構造はSB03と同様、東西に棟を持つが、妻側が平側に比して極端に広く、南北に庇を有しているなど、時期は異なるが性格は同じ目的で使用された建物であることが明らかである。

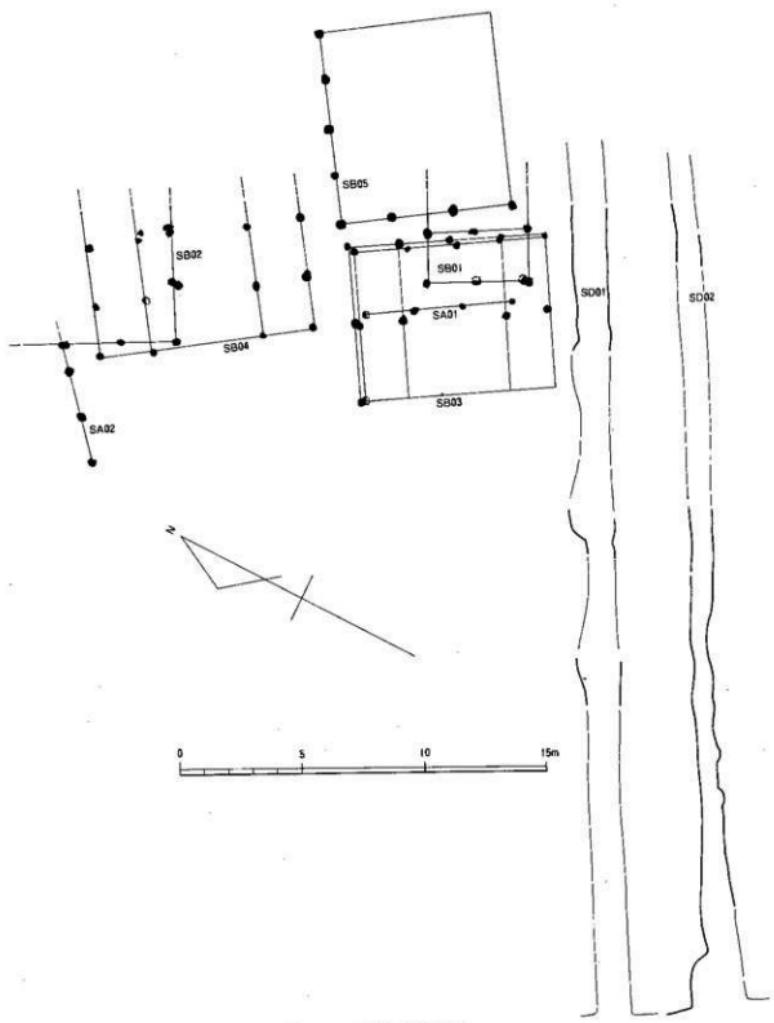
規模は3間×2間(8.7m×4.4m)で、特に身舎の梁間が4.5mと大きく、その割には柱が細く、あるいは柱穴の遺存が悪いことから削平されていることも考えられる。

SB05 SB01に重複し、SB04の南東1.5mに位置する東西に棟を持つ3間×4間(7m×7.8m)の建物跡で、中央は柵作の関係で確認できなかったが、住居様の建物と思われる。

以上が建物跡の概要である。

柵

次に柵について述べてみると、一応2条考えられる。



挿図4 建物跡構成図

SA01 SB04、SB05の建物と方位を同じくし、SB04の西柱列にはば一致してSB05の西4mの位置で南北に3間(6m)あり、SB05の妻に対する目隠しの様な状況である。

SA02 SB02に重複して中央の広い3間(5m)の棚であるが、方位はどの建物とも合わず、あるいは棚と考えられないかも分らない。

溝

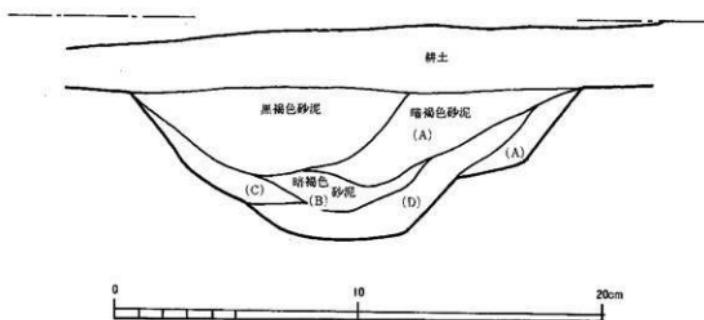
今調査では合計4条の溝が確認されている。この内2条は前述の東西に走る現況水路の北に検出したもので、ここでは他の2条について概要を記す。

SD01 SB01、SB02と並行する東西に走る溝で、幅約1.5mを有する比較的大規模なものである。そして流れの方向については後述するSD02で明らかのように、建物群のやや西のところに分水嶺があり、ここから東と西に流れている。また、溝の北岸には、この溝と同時期に掘られた溝より深い2m×1mの隨円形土塙が、約6mの間を持って3ヶ所確認されているが、その性格は不明である。

SD02 SD01の南3mをまったく平行して流れる溝で、相違点は、岸に土塙がないこと、幅が0.8mと狭いということだけで、先述のとおり分水嶺を持ち、東と西に流れている。特に深さは分水付近では0.2~0.3mであるが西端では1.2m近くなり落差の大きな溝である(第5図)。また、同西端では溝幅が広かり、ここから北に流れることが明らかで、SD01とも合流するものと思われる。

この結果SD01とSD02の間の幅3mは道路跡であると思われる。

以上が今調査で確認された主な遺構であるが、最後に建物群の西、つまりSD01、SD02の南北には建物跡、土塙等がまったく検出されず広場としての前庭が考えられることである。これも当然遺構とすべきもので、ここに記しておく。



挿図5 SD02内堆積土層図

4. 遺 物

調査前には桑伐根の際の遺物出土等を聞いており、若干期待をしていたところであるが、予想に反し、ほとんど出土しなかった。とりわけ実測可能なものは数点でしかなかった(第6図)。

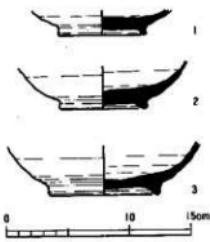
1. 灰白色を呈する焼の硬い灰釉陶器で、系切底を有する高台径7.2cmのものである。胎土には微砂粒を含み、内面は摩耗しており、外面は体部下方、底部とも撫により調整している。なお、この遺物はSB05の柱穴埋土内より出土している。

2. SD02の埋土上層より出土したもので、灰白色的焼の硬い無釉のものである。高台径は7.1cmを計り、内外面とも調整法は1と同様である。

猿投窓の製品である。

3. これもSD02上層より出土したもので、上記のものに比して大形で、高台径8.9cmを計る。2と同様無釉であり、全体の調整も同様である。

以上の他に遺物としては小片であるが、土師器皿片や、溝上層からは黒色土器片も出土している。



挿図6 遺物実測図

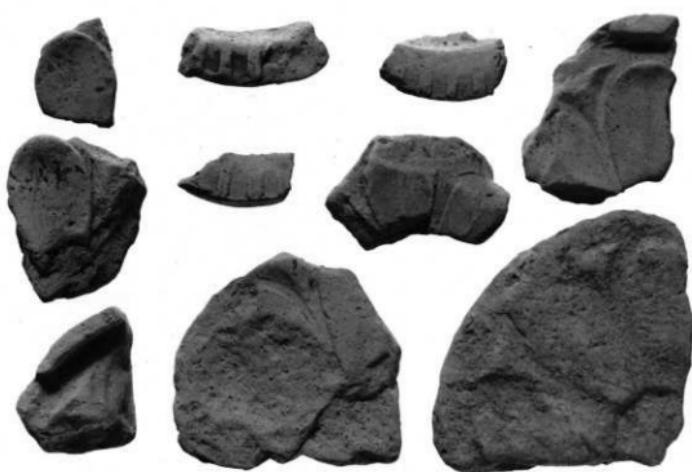
5. ま と め

以上が今調査の概要であるが、一応簡単にまとめてみると、

- (1)高畠地区の中央を流れる現況水路以東は自然水路で他に造構はなかった。
- (2)同水路に直交する現況水路以北も造構はほとんどない。ただし、田による削平も考えられる。
- (3)2条の溝に狭まれた道路の南北に屋敷地があり、各屋敷は西方に前庭を有している。
- (4)建物は大別して3時期、建替えを含めると5時期あり、時期が異なっても同じ場所、同じ構造の建物があることから、長期に渡り同じ目的、用途で使用されたこと。
- (5)遺物が少なく詳細は不明であるが、奈良時代に上げるものではなく、平安時代後期に中心があること。

以上が、その要点である。なお、当該地区調査は昭和52年度に引き続き調査を実施する予定であるため、具体的な考察については、後記に委ねたい。

(近藤 滋)



1 出土遺物



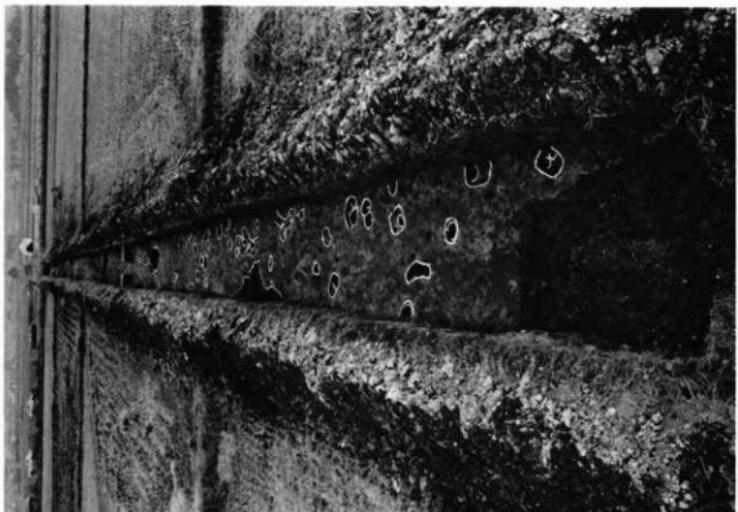
2 出土遺物



1 出土遺物



2 出土遺物



1 N区全景



2 N-1, N-2近景

図版四 野洲町下緑子遺跡N地区



1 N-3, W-4 近景



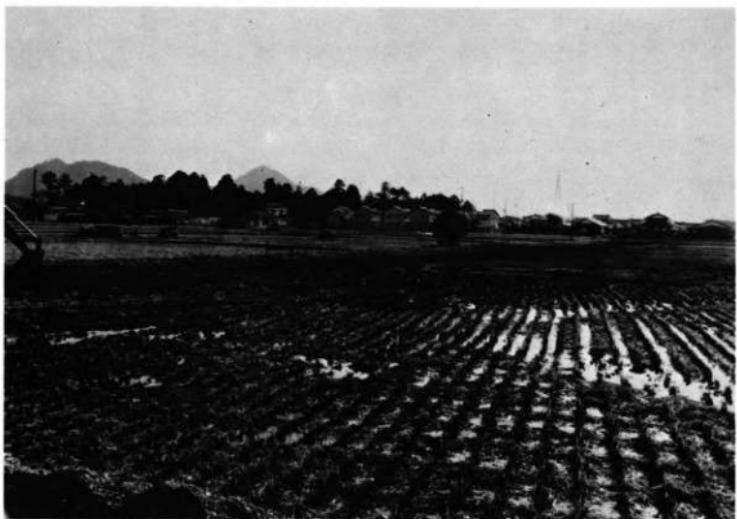
2 N-5, N-6 近景



1 N-6, N-7近景



2 N-6, 柱根出土状況



道跡全景（北から）



A トレンチ全景（北東から）



▲ Cトレンチ全景（北から）
► Cトレンチ全景（南から）



Pトレンチ溝状遺構全景（西から）



Pトレンチ溝状遺構細部（南から）



Pトレンチ溝状遺構細部（南から）



土師器



黒色土器



須恵器



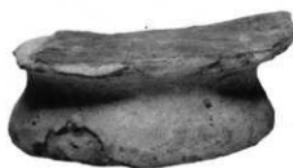
陶器



土師器（7）



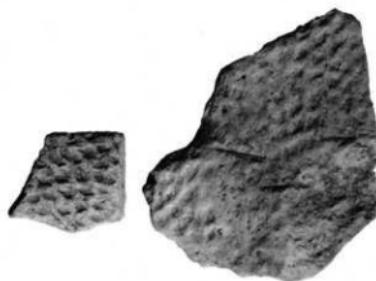
黑色土器（19）



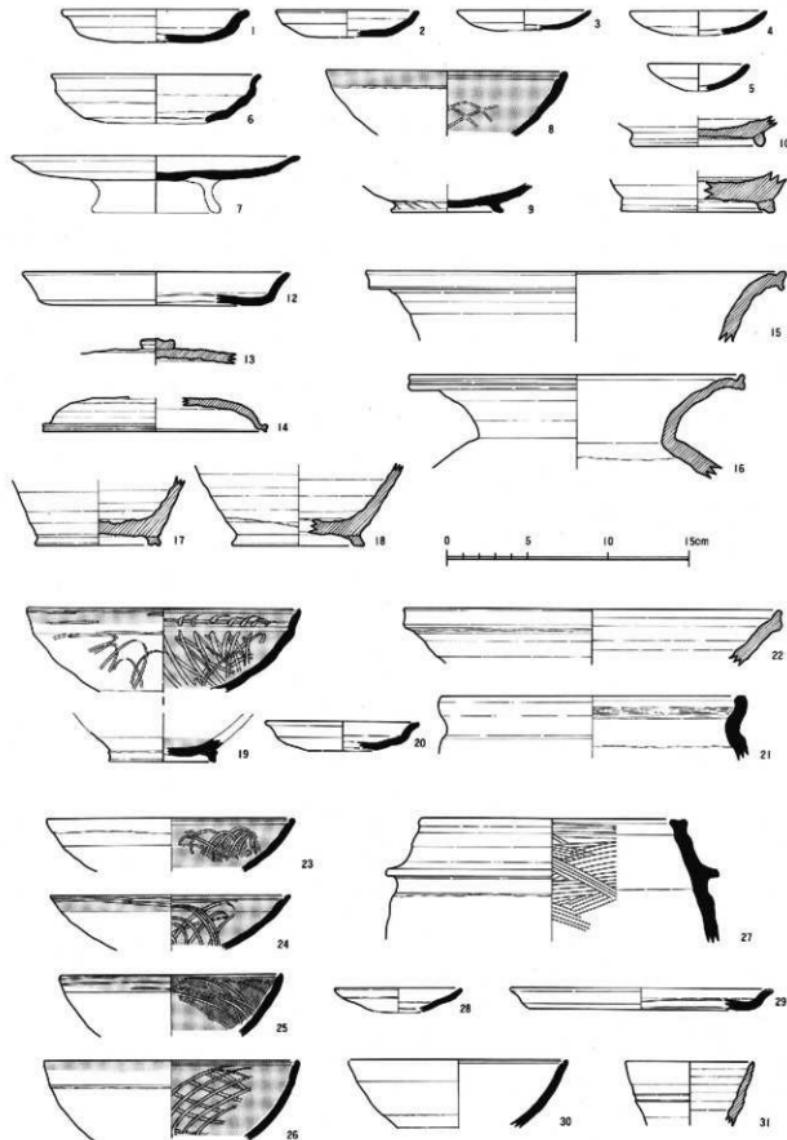
土師器



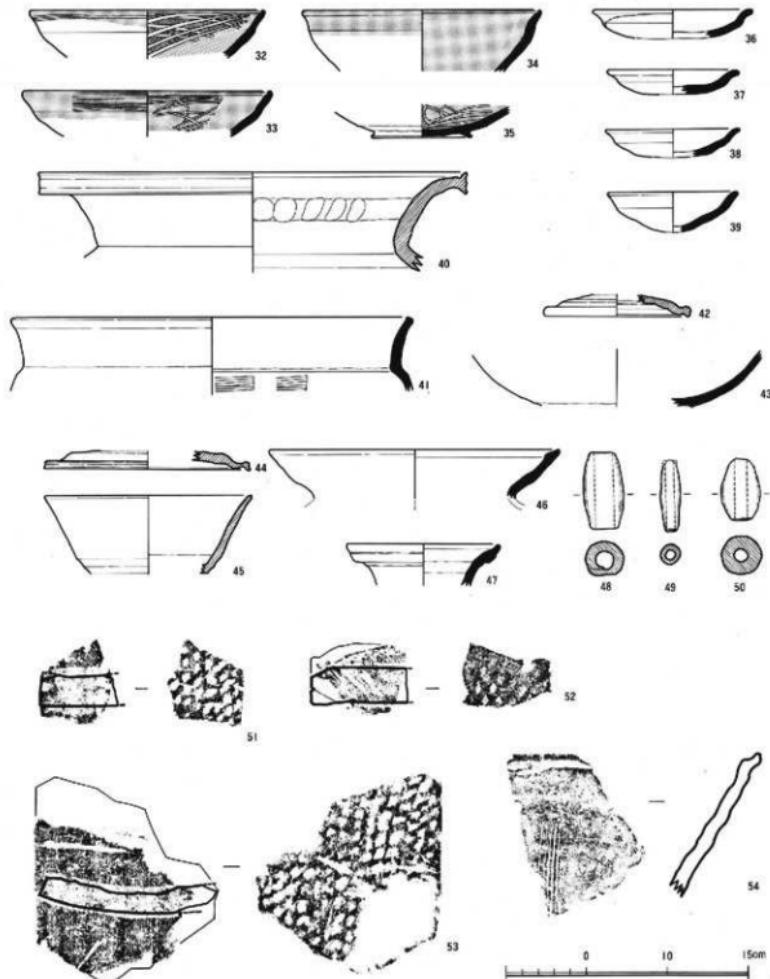
土錘（48～50）



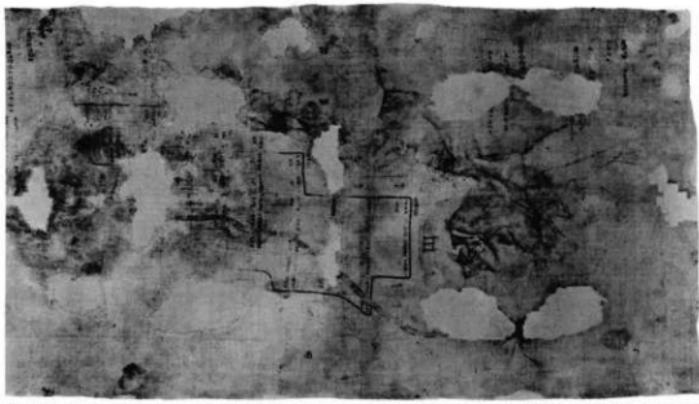
瓦（51，53）



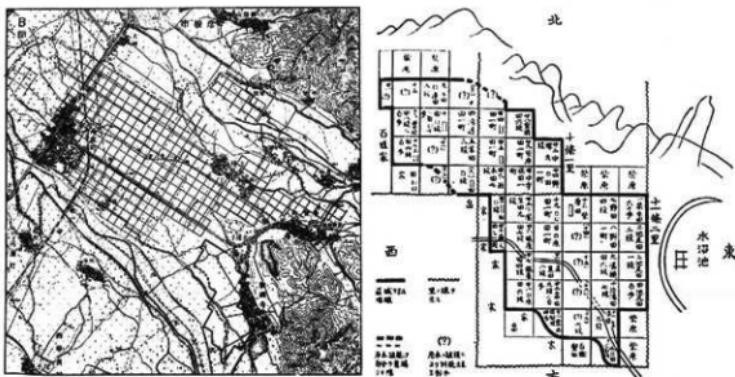
遺物実測図（1～31）



遺物実測図 (32-54)

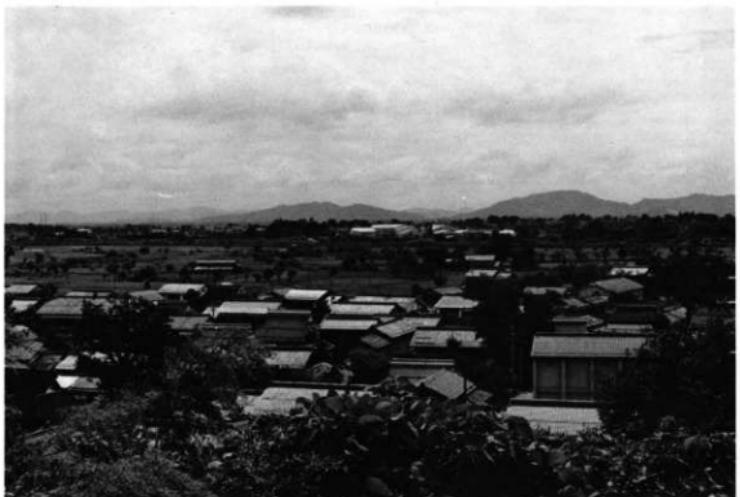


1 水沼莊古絵図（天平勝宝3年正倉院藏）



2 大上都条里と水沼莊城想定図

3 絵図莊域復原略図



1 高畠地区遠景（中央工場の左手前微高地。手前は敏満寺集落）



2 高畠東辺を流れる二ノ井幹線（遠景は敏満寺集落）



1 掘立柱検出状況（西より）



2 掘立柱検出状況（南より）



1 溝1、2および道路跡



2 古地中央を流れる川跡

昭和52年3月25日

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅳ—I

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL(075)351-6034